

必要があつたわけである（蒼沼洋「中国革命四十年」）。二全大会以後に表面化してきた「蒋介石追ひ落とし」「北伐阻止」と表裏一体の意味をもつものであつた。

蔣が共産党を押へて、北伐を決意したのは、一九二六年三月の中山艦事件が契機であつた。これは海軍局長代理・李之竜（共産黨員）を中心とする共産党の陰謀で、蒋介石の乗用艦中山号を偽の命令で動かして、蒋介石を中山号に誘込み、ソ連に連行して始末せんとする策動であつた。これに気づいた蔣は直ちに戒厳令を布告、李をはじめ軍部と党内の代表的共産分子を逮捕し、軍を以て中山号を奪還したのみならず、事件の背後に居るキサンカ等ロシア人顧問団の一部を解任し、ソ連に帰国させたのであつた。国民党左派の領袖汪精衛は、事件後の五月、ひそかに広州を去つて病氣治療と称してフランスに向かつた。

中山艦事件を転機として、蒋介石と共産党・国民党左派の関係は急速に悪化した。同時に、共産党の広州基地奪取の陰謀を挫折せしめ、左派の領袖・汪が外遊に出た結果、軍を背景にした蔣の地位は高まつた。蔣は中央に対して北伐を建議し、これを中央は受け入れた。軍事委員会主席に推挙された蔣は、六月には国民政府から国民革命軍総司令に任命された。かくして北伐計画は急速に発展し、一九二六年七月一日、国民政府軍事委員会は北伐軍動員令を布告、八軍十萬の軍隊が進発の態勢を整へたのである。

第九章 赤色支那への対応

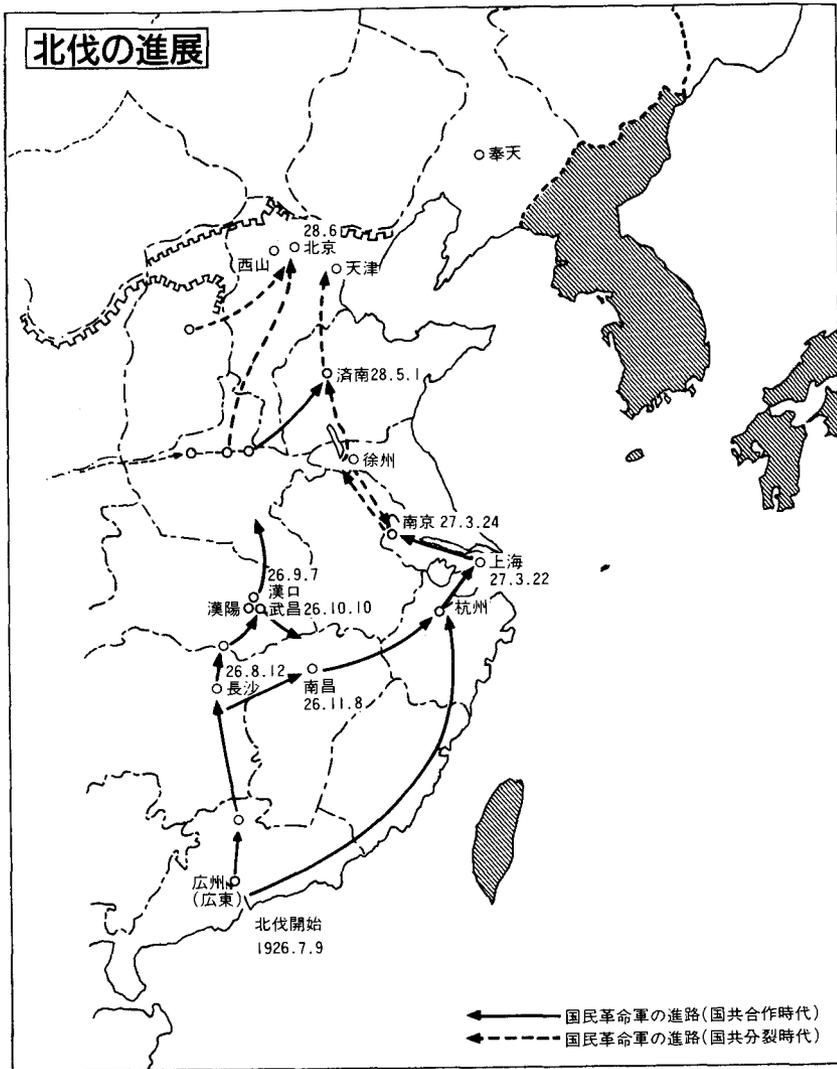
第一節 南京事件

北伐を逆用したコミンテルン

孫文の急逝と共に国共合作の包蔵する矛盾は一気に表面化し、その中で擡頭してきたのが軍事力を掌握した蒋介石であった。彼は中国統一のため北伐を主張、蔣を総司令とする国民革命軍は一九二六年（大正十五年）七月広東を進発、二年後の一九二八年六月、北京入城で完成する。この北伐の過程で、中国は日本はじめ諸外国の居留民と権益財産に対して幾多の無法行為に出た。そして多くの場合、背後に共産党の策動があつた。満洲事変への道は、「ある日突然」ではなく、激烈な排日と赤色テロに彩られた歴史展開の裡に準備されて行つたのである。

蒋介石を総司令とする国民革命軍による北伐の対象は北洋軍閥であつた。当時北洋軍閥は、呉佩孚の二十五万と称せられる部隊が河南・湖北・湖南・四川・貴州の各省に拠り、また孫伝芳は二十万の兵力を擁して江蘇・浙江・安徽・福建・江西の五省を支配し、更に張作霖の奉天軍とこれにつながる河北、山東両軍の総兵力は五十万に上り、東三省（満洲）、熱河、チャハル、河北、山東の各省に一大勢力を形成してゐた。一方国民革命軍の総兵力は八軍十万であつた。七月九日、国民革命軍は出師の誓ひを発し、翌十日、湖南省都長沙を占領、その後、全軍を右翼、中央、左翼の三方面に分けて前進した。

北伐開始が確定するや、中共は態度を一変させ、コミンテルンの指令によつて熱心な北伐支持へ方向転換し、革命軍の戦果のあとに自己の政治勢力を扶植してゆくこと、殊に武漢・上海には労働運動を、他の地方には農民運動



を積極的に推進してゆくことがボロヂンから中共へ厳命されたのである。かくして中共は、北伐の進展に従つて、むしろ積極的に農民運動（広東、湖南、江西、湖北）及び労働運動（上海、漢口）に全力を注ぎ、一挙に国民革命の主導権を握らんと考へるに至り、共産党員は勇躍して北伐軍の先頭に立つて、行く先々に農民運動及び労働運動を展開した。その努力の一半は次の数字に明らかである（波多野乾一「中国共産党史」第一巻）。

	労働組合員(人)	党員(人)	農民协会会员(人)
一九二五年	四五〇、〇〇〇	九九四	二〇〇、〇〇〇
一九二六年	一、二〇〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
一九二七年	二、八〇〇、〇〇〇	五七、九〇〇	九、八〇〇、〇〇〇

武漢赤色政府成立にモスクワ狂喜す

革命軍の進撃は目ざましく、九月には漢陽、続いて漢口を占領、十月十日には武昌を陥落せしめ、ここに武漢三鎮は完全に革命軍の支配する所となつた。武漢が陥落するや、中共は蒋介石の南昌攻撃に従はず、武漢地方の最大軍閥・唐生智と組んで武漢を中共並びに国民党左派の根拠地たらしめんとしたのである。

これに対して蔣は、ひとまづ屈して上海・南京攻撃に専念することにし、武漢派との妥協を決心した。ここに於て、一九二七年（昭和二年）二月二十一日、国民党本部と政府の武漢移転が宣言され、武漢政府が樹立された。これは共産党と極左派による赤色政権であつた。

武漢政府成立の報は、コミンテルンを狂喜せしめた。コミンテルンの支那革命に対する態度は、北伐前まではさほど露骨なものではなかつたが、国民革命軍が武漢を占拠し、国民党内の左右対立が表面化するにつれて、コミンテルンの、中共を通じての対支工作も露骨となつて行つた。折あたかも、ソ連では西守東進のスターリンがコミン

テルンの実権を掌握したこともあつて、コミンテルンの対支工作はいよいよ積極化したのである。

その第一の露骨な干渉が、一九二六年十二月の所謂「コミンテルン十二月決議」であつた。この決議は、共産党指導下に農民を武装させること、国民党右派と徹底的に闘ふこと等を指示してをり、明確に三民主義を否認し、共産主義暴力路線を打ち出したものであつた（日本外事協会「支那に於ける共産主義運動」）。このコミンテルン決議は一九二七年四月、張作霖政府が北京のソ連大使館を搜索した際に押収したものと云はれてゐる。

この十二月決議は、さなきだに思ひ上がった中共をますます増長せしめ、蒋介石の北伐を妨害し、蔣を打倒する策謀と過激な工作にいよいよ狂奔せしめる結果をもたらし、武漢政府成立の翌三月、蒋介石から国民革命軍総司令の地位を剝奪したのであつた。

蔣は武漢政府から国民革命軍総司令の地位を取消されたものの、それは辞令だけのことで、実際には強大な軍事力を有してゐた。蔣は一九二七年三月下旬までに上海近郊・杭州・南京を占領、長江下流の江南地域をほぼ掌握した。斯くして蔣派の勢力は次第に南京に集まり、南京・武漢両派の対立はいよいよ深まつた。

英租界実力回収と列国の態度

北伐途上に起つたかの有名な南京事件に先立つて、その不吉な前兆とも云ふべく漢口及び九江（江西省）の英国租界奪取事件が発生した。

漢口にはイギリス、日本、フランスの租界があるが、イギリス租界が漢口の商業中心地であり、日本の主要な銀行や商店も英租界で開業してゐた。この漢口の英租界が、一九二七年一月三日夕刻、支那側によつて実力接收され、これに続いて九江の英租界も一月七日、支那側に接收されたのである。

国民政府による漢口・九江の英租界奪取は、英国はじめ列国にとつては一大衝撃であつた。漢口、九江の事態を

みた列国が支那に於ける最大の権益集中地である上海の租界防衛策を急遽講ずるに至つたのは当然であつた。租界は（その存在の当否は別として）国際条約に基づいて設定されたものである。それを実力で支那側が回収せんとする以上、列国側は実力を以て阻止する以外方法はない。日、英、米、仏四国は一月中旬、万一の場合、約四万乃至五千の兵力を共同で上海に集中し得る計画を整へた。

三月二十一日、杭州から北上した革命軍は上海南方四マイルに達し、上海には戒嚴令が布かれた。上海工部局は義勇兵や警察を動員するとともに、列国海軍の援助を求め、要請に応じて米・日等の陸戦隊が上陸した。列国の陸上兵力は一万二千五百（英九千、米千五百、日千五百、仏四百、伊五十、上海義勇兵を含まず）に達した。又海軍力としては日本十一、英十一、米五をはじめ三十一隻が上海に集中した。

このやうな列国軍隊の警備のもと、国民革命軍の上海入市に於ては憂慮された革命軍と外国軍隊との衝突は発生しなかつたのである。

南京事件の発生

だが上海で回避された革命軍と外国側との衝突は、革命軍の南京進駐の際に発生した。

（註）北伐の革命軍は全軍を三路に分け、次の如く編成されてゐた。

①西路軍（唐生智指揮。京漢線に沿つて北上、河南の呉佩孚軍と対峙）

②東路軍（何応欽総指揮、白崇禧前敵總司令。福建、江西から浙江を攻略）

③中路軍（程潛総指揮。第二軍、第六軍。揚子江南岸を東進、南京を攻略）

江左軍（李宗仁総指揮。揚子江北岸を東進、津浦線上の要衝蚌埠「ハンプルー」を目標す）

北軍の潰滅の迫つた三月二十二日午後七時、森岡領事は在留婦女子全部を南京領事館内に避難させ、軍艦松から

は荒木亀雄海軍大尉引率の下に兵員九名、通信兵一名が派遣された。翌三月二十三日夕刻、北軍の敗兵が南門から南京城内に雪崩れ込み、領事館門前を横切つて下関方面に退却を開始した。そこで領事は男子をも領事館に避難させた。領事館に集合した日本人は約百名。夜に入り、領事館は前門を閉ざして内に土嚢を積み機関銃を備へつけ、兵員は小銃を持ち武装して警戒に當つてゐた。

三月二十四日午前五時半頃、青天白日旗をかざした革命軍（南軍）が続々入城、領事館前を通過して下関に向かつた。掠奪は敗残部隊によつて行なはれるのが常なので、国民革命軍の入城とともに掠奪の危険は薄らいだ。又、十人の水兵で数千の支那兵に武力対抗することは絶対不可能なので、むしろ革命軍や一般民衆の敵愾心を挑発せぬため、早きに及んで土嚢や機関銃は撤去する方が有利だと領事は判断した。荒木大尉もこれに同意したので、土嚢、機関銃を撤去し、かつ警備兵の武装をといて武器を一括格納するとともに領事館正門の門扉を開いた。

ところが間もなく約五十名の革命軍正規兵が、制服、制帽に小銃を携へ、領事館の事務所、館員の官舎に乱入した。これを阻止しようとした領事館警察の木村警察署長は直ちに逮捕され所持品全部を奪はれ、またかたはらより小銃で狙撃され前腕部貫通傷を受けた。事務所に居た駐在武官の根本博少佐も金庫の鍵を要求され、拒否すると銃床で腰部を殴打された。兵士らは事務所から官邸食堂に向け実弾を発射し、呼笛を合図に官邸を襲ひ、森岡領事の病室（森岡は約一カ月前から左脚脱疽で歩行不能となり病臥してゐた）をはじめ掠奪を開始した。以後、自動車、馬車、人力車等運搬具を用意して続々と構内に侵入してきた多数の兵士は、官邸各所を徹底的に掠奪した。「避難者は虎狼に襲はれたる群羊の如く四方八方に追ひ回され、婦人は幾回となく忍ぶべからざる身体検査を受け叫喚悲鳴聞くに忍びず」と森岡は報告した。病床の森岡領事も寝巻、寝具まで剥ぎ取られ、命中はしなかつたが実弾二発の狙撃を受けた。木村署長、根本少佐はともに銃剣にて刺された。荒木大尉ら兵士十名は軍装のため革命軍兵士を挑発するのを避けて、官邸北側のボーイ室に避難してゐた。尼港事件の記憶がまだ生々しい時期でもあり、居留民達はあくまで陸戦隊が無抵抗主義をとることを懇請し、各兵の階級章とか帽子のやうな標識を一時取り去るやう森岡領事

に懇望した。森岡は荒木大尉と協議したところ、大尉は居留民の安全のためその望みを容れた。その後侵入した南軍兵士の数は百五十余名から二百余名に達し、掠奪は三時間余にわたった。暴徒と化した支那兵達は青天白日旗を携へ、口々に「日英帝國主義打倒」、「華俄一家（中国とソ連は一家である）」等の標語を呼号した。そのうち女子供を含む数百名の一般人も押寄せて掠奪に加はり、床板、便器、空瓶に至るまで一物も残さず持ち去った（森岡領事報告。臼井勝美「日中外交史ノ北伐の時代」、衛藤瀋吉論文「南京事件と日米」、佐々木到一「ある軍人の自伝」）。

その日の夕方、我が官民一同は領事館を引揚げ、揚子江上の軍艦に収容されたが、領事館の警備に任じてゐた荒木海軍大尉は事件後の三月二十九日、軍艦利根艦上にて引責自決を図つた。

英米もまた領事館、学校、会社等の掠奪を受けた。英米両国は三月二十七日午後三時四十分より約一時間、避難民救援のため江上の軍艦より南京城内砲撃を行なつた。発射弾数は二百に達した。なほ、我が駆逐艦の吉田司令は、城内邦人の情況が不明で、城内砲撃はその虐殺を誘致する惧れありとして砲撃には参加しなかつた（外務省記録「南京事件南軍の暴行状況」）。英米軍艦の砲撃による死者は十二名、傷者は二十名であつた（支那外交部調査）。

結局南京事件による各国死者は日本一、英国二、米国一、伊国一、仏国一、デンマーク一の計七名で他に二名が行方不明になつた（外務省記録「南京に於ける支那兵の暴行及び掠奪事件」）。

背後にコミンテルンの策謀

南京事件を仕組んだのは何者だつたのか。森岡領事は、南軍中の共産党代表及び共産派下級将校が南京共産党支部員と予め計画準備の上行なつた組織的かつ排外的暴動であると報告したが、幣原外相もこの報告に基づいて、事件は「蔣を難局に立たしめ失脚せしめんとする苦肉の計略」と判断した。

国民革命軍側も「事件は革命軍内部の不良分子と南京共産党支部員が通謀して仕組んだ」とする見解を日本

側に伝えてきてゐた。

一方、在南京米領事デイヴィスは「毫末の疑問の余地なく、事件を起したのは国民革命軍正規兵であり、彼らは命令によつて行動してゐた。北軍敗残兵によつて外国人が害された例は一つもない」旨、本国へ報告したし、マクマレー公使も「外国人に対するこのテロと凌辱は広東政府によつて公式に支持され指導されてゐたのみならず、同政府によつて予め準備されてゐた」ことに「絶対的な確信」をもつてゐたのである（三月二十八日付ケロッグ國務長官宛報告）。

南京事件が革命軍の中に混入した中共分子による仕業であることは疑ひの余地があるまい。そして事件が、ソ連の示唆あるいは指令の下にひき起されたことも、まづ確実と云つてよいだらう。その一つの証拠は、事件の前年一九二六年十一月、コミンテルン第七次会議の決定に基づいてモスクワが北京駐在ソ連大使館付武官に訓令した秘密文書である。この文書は一部分焼失した形で国民党右派が入手したが、その訓令の第五項には次の如く記されてゐたと云ふ。「あらゆる方法を用ゐて国民大衆による外人排斥をひき起さなければならない。この目的達成のためには、各国と大衆を武力衝突させなければならない。これによつて各国の干渉をひき起すことができれば、更に方法を選ばず、それを貫徹すべきである。たとへ、略奪や多数の惨殺をもたらすものであつても構はない。大衆が歐洲の軍隊と衝突した時には、その機会を決して逃してはいけない」（「蔣介石秘録」）

この訓令は、正に南京事件の背後関係の所在を明白に裏書きしたものである。国民革命軍及び大衆と外国との間に衝突を惹起し、蔣介石を失脚せしめ、もつて国民党右派を崩し一挙に共産化を図る——これがコミンテルンと支那共産党の計略だつた。この陰謀の蔭には、例によつてソ連人顧問ボロチンがゐた。『蔣介石秘録』によれば、その手先となつたのは、第六軍政治部主任・林祖涵と第二軍政治部主任・李富春の両名の共産党員であり、総指揮・程潜もまた彼等に操られてゐた。即ち、事件前夜の三月二十三日、ボロチンが武漢で招集した「中央政治委員会」で、林は程潜を江蘇政務委員会（上海・南京地方を管轄）主席にするやう提案してゐるのであつて、程潜は江蘇の地

盤欲しさに共産党に協力したのである。そして事件当日の朝、最初に南京に入ったのが上記第二軍と第六軍だった。

事件が共産党の陰謀であることは国際的にも承認された。英外相チェンバレンは五月九日、下院に於て「南京事件はコミンテルンの指揮の下に組織され、発動された。その計画は列強をたきつけて、蔣介石氏を困難におち入らせる所にあつたと思はれる。この事件のため中国人民は共産党員とソ連の顧問を信用しなくなつた。英国政府としても、南京事件の取扱ひに関して方針を変換する余地がある」と演説し、この三日後にロンドンのソ連通商代表部を捜索して文書を押収、五月二十七日英国は対ソ国交を断絶した。

あらゆる状況証拠が、事件は革命軍に混入した共産分子の計画的仕業であることを示してゐる。更に、モスクワからの上記秘密指令をはじめ、張作霖が北京のソ連大使館捜索で押収した数々の秘密文書（後述）は、該事件がコミンテルンの革命戦略に基づいて計画準備された暴動であることを、一点の疑ひの余地なく物語つてゐる。

事件を歪曲する中国の教科書

ところで南京事件についての『中国歴史』（既出）の記述は次の如くだ。

「帝国主義は中国での反動支配を守るため革命を破壊しようとした。三月二十四日北伐軍は南京を占領した。その日の夜、イギリス、アメリカ、日本などの帝国主義は狂つたように南京城を砲撃し、中国軍民二千人余りを死傷させた」

中国兵の蛮行は一行も記さず、列国は理由なく南京を砲撃したかの如く書き、また砲撃を「夜」とすることによつて無差別砲撃の印象を与へようとしてゐる（実際の砲撃は午後三時四十分から約一時間）。その上、完全無抵抗主義を貫いた我国も砲撃に参加したと嘘を書いて日本に濡れ衣を着せ、中国側死傷者数を六十倍にもふくらませて、お

家芸の白髪三千丈式誇張をやつてのけてゐる。歴史偽造の好例と云ふべきだ。

右のほかにも例へば胡華の「中国新民主主義革命史」によれば、「反動側の軍隊が逃走するに際して、南京城内に暴行略奪が発生した。その夜、英・米・日・仏・伊などの国の領事は、下関（シャーカーン）の江上に碇泊中の列国軍艦に命令して南京城内を砲撃せしめた。中国軍民の死傷は二千余人であつた」とあり、暴行掠奪を起したのは南軍ではなく北軍であるとして罪を北軍になすりつけ、やはり日本が砲撃に参加したことになつて居る。

同様に広く読まれてゐる陳伯達の「人民の公敵蔣介石」では暴行略奪には触れず、「北伐軍が南京を攻め落とし、米・英の軍艦が南京に向つて発砲し、終日砲撃しつづけた」と記してあると云ふ。米・英を悪者に仕立てるために「終日砲撃しつづけた」などと云ふ嘘まで作り上げて書いてゐるわけだ（衛藤前掲論文）。

これが現代中国の国定教科書の南京事件記述である。これが全中国の学校で一律に「歴史的事実」として青少年の頭に吹き込まれてゐるのである。彼等が、どの様な対日感情を心に深く蔵して成長してゆくか、容易に想像できよう。将来の日中関係を思ふ時、由々しいことと云はねばならない。だが、これが口に「中日友好」を唱えてやまない中国の姿なのだ。日本の歴史教科書に於ける事実の「歪曲」を非難し、「事実をありのままに書け」と求めてやまない中国——その中国自身の歴史教科書こそ史実の「歪曲」「捏造」そして「対日憎悪」の標本の如きものであると云ふ事実を、日本人はしつかり見きはめておく必要がある。

発覚したコミンテルンの秘密指令

南京事件から間もない四月六日、北京の支配者張作霖はソ連大使館を捜索、潜伏してゐた中共黨員多数を逮捕、共産革命工作の秘密指令等の証拠書類を押収した。李大釗等の共産黨員二十名が処刑されたが、南京事件がスターリンの世界赤化政策の線上に発生したことはいよいよ明白となつた。上海でもボロチンの指導で赤い市民政府